

近畿中学校駅伝

(11/29・30 兵庫県豊岡市奥神鍋周辺コース) RESULTS

近畿2府4県の各予選会で5位までのチーム、合計30チームが出場

<女子> 下段は区間記録と区間順位、上段は通過記録と通過順位 出場36チーム

	1区(3.2km)	2区(2.1km)	3区(2.1km)	4区(2.1km)	5区(3.2km)	計12.7km
東雲	木下	岡崎	高橋	鈴木	梶山	45分08秒 14位
	11:43 ²⁵	19:01 ²³ 7:18 ¹⁶	26:15 ¹⁷ 7:14 ¹³	33:32 ¹⁶ 7:17 ¹¹	45:08 ¹⁵ 11:36 ¹⁴	

<総合順位>

1位 桂(京都) 42分05秒 2位 小野(兵庫) 42分31秒 3位 三木(兵庫) 42分40秒
4位 加古川山手(兵庫) 42分53秒 5位 樫原(京都) 43分18秒 6位 浜寺南(大阪) 43分23秒
7位 広野(京都) 43分28秒 8位 小野南(兵庫) 43分29秒

<男子> 下段は区間記録と区間順位、上段は通過記録と通過順位 出場36チーム

	1区(3.2km)	2区(3.2km)	3区(3.2km)	4区(3.2km)	5区(3.2km)	6区(3.2km)	計19.2km
東雲	奥村	石田	松本	島口	白石	寺井	1時間02分50秒 2位
	10:26 ²⁶	20:53 ²³ 10:27 ¹⁴	31:20 ¹⁶ 10:27 ⁸	41:51 ¹³ 10:31 ⁸	52:22 ¹³ 10:31 ⁸	62:50 ⁹ 10:28 ¹⁰	

<総合順位>

1位 加古川山手(兵庫) 1時間00分34秒 2位 宝殿(兵庫) 1時間00分53秒
3位 大白書(兵庫) 1時間01分09秒 4位 陵南(兵庫) 1時間01分20秒
5位 豊富(兵庫) 1時間01分32秒 6位 桂(京都) 1時間02分28秒
7位 広野(京都) 1時間02分36秒 8位 彦根南(滋賀) 1時間02分46秒

「全員駅伝」で力を十二分に発揮！東雲男子9位!! 東雲女子15位!!!

○ 28日(金) 期末試験最終日。3時間目の試験が終了したらすぐに大荷物を抱えて観光バスに乗車。途中、西中学校に立ち寄って、西中男子駅伝チームも合流。車内で昼食をとるといふ強行日程で、3時頃に兵庫県豊岡市日高町の奥神鍋に到着。さっそくコース



下見を実施。その後、コースの集団ジョグ。男子と女子の1区、5区が走る3.2kmコースは中継してから長い下りとなる。周回コースであるので、中継所まで小刻みな上りとなるコースである。女子の2~4区が走る2.1kmコースも小刻みなアップダウンが続く周回コースである。そして、何よりも遠くのコースが見えるような吹きさらしの場所である。風で記録が大きく左右されるコースとなる。それでも、大阪の選手にとっては珍しい一般道を使って駅伝ができるのであ

る。決戦前の緊張感よりも、わくわくする笑顔の初日の試走となりました。この日の宿舎は東雲の男女駅伝チームの貸し切りとなった。おいしい夕食をいただいて、プレイルームでミーティングの後、時間限定の卓球大会。リラックスした楽しい時間を過ごしました。

○ 29日(土) 朝から雨が降り続くあいにくの天気となった。朝一番に調整練習をする予定を変更して、9時30分頃にバス乗車。近くの道の駅に直行。ここでみんなが楽しみにしていたおみやげタイムとしました。そこから、バスで20分ほど走って日高文化体育館に移動。11時30分からの開会式にのぞむ。開会式は多くの来賓を迎え厳粛な雰囲気でおこなわれたので、自分たちが大阪の代表チームとして、近畿駅伝に出場していることを改めて実感したことでしょう。いったん、宿舎に戻って昼食。



14時から奥神鍋体育館で監督会議。この会議が終了した後、小雨まじりの中調整練習をおこなう。この日まで何の不安要素もなく調整できたことに胸をなでおろした。簡単ではないきびしい戦いとなるが、しっかり走ってくれるはずだという気持ちになった。夜のミーティングでもいくつかの最終確認にとどめ、短めに切り上げた。

- 30日(日)大会当日。穏やかに晴れて心配した風もない。絶好の駅伝日和となった。前日までとは打って変わって、色とりどりののぼりや横断幕、さらには各校のテントがあちこちにはりめぐされてにぎやかな風景となる。ウォームアップ場で緊張した面持ちでアップを繰り返す1区2年生木下の動きを見守った。この土壇場までくると監督というのは無力なもので、もう何もしてやることはできない。選手の自主性を信じて、その場しのぎの余分な声かけはしない方がいいと判断した。2区を走る岡崎も表情が集中モードに変わっていくのが遠くからでもよくわかった。やがて、スタート前。ベンチコートを脱いで、たすきを確認。色とりどりのユニフォームを着た選手がスタート位置に並ぶ。木下は2列目のなかほどからのスタートとなった。運命の号砲とともに、大歓声があがった。この歓声が先導車とともにこちらに近づいてくる。やや左に折れて下り坂にさしかかって50mほどのところで、大集団の中の木下を見つけて、大声で声援を送った。もう一度木下の姿を見て応援しようと、規制された歩道を迂回しながら、小走りに移動した。遠目に先頭集団が見えた。木下はその先頭集団からやや離れた位置にいたが、この展開は想定内。木下は1500m4分50秒17の記録を持つ、東雲女子駅伝チームのエースである。予選会となったこの大阪中学駅伝でも本調子ではなかったが、何とか1区の仕事を務めあげた選手である。この近畿駅伝の花の1区では、全国大会に出場して活躍した選手もいる。その中で苦しい位置取りになることは十分承知していた。1区の区間賞は全国駅伝に出場する京都の桂中学校の村尾選手で10分33秒という男子並みの驚異的な記録である。6位で帰ってきた選手が11分ちょうど。そこから縦一列にほぼ並んでいるように次々と選手が中継所に飛びこんで来る。どの選手も必死の形相のラストスパートで迫力満点であった。木下も最後の力を振り絞る。大阪の泉大津東陽の選手に1秒差で続いてたすきを2区の岡崎に渡す。11分43秒の記録で25位という結果であった。



- 2区の3年生岡崎はたすきを受け取ると気迫の走りを見せた。このたすきの重みを一番感じていたのは、この岡崎だったかも知れない。彼女は大阪中学校駅伝のときもその予選会である三島大会でも補欠の選手であった。つまり、東雲女子駅伝チームが近畿大会出場を決めたからこそ巡って来たチャンスなのである。もちろん、恩情でチャンスをもらったわけでもない。大阪中学校駅伝の4日前くらいから貧血が治り、今や練習でも5区を任している梶山に次いで強い選手に成長したのである。つまりは、自信を持ってこの勝負所の2区2.1kmに起用したのだ。駅伝は究極の団体競技である。それだけに、選手選考には透明感のある公平性が求められる。実は大会6日前に正選手とそのオーダーを発表した。3回のポイント練習で結果を残せなかったのが同じ3年生の高橋であった。1年生の時からチームの駅伝を引っ張って来た選手だけに、はずしくなかつたが、情に流されては本物の駅伝チームはできないと心を鬼にした。発表のとき、高橋は涙をぼろぼろと流した。この場面でまわりから同情を買うような涙を流してはいけないことは、彼女は百も承知していたはずである。それでも涙がポタポタと自然に落ちてくるのだ。次の日からの彼女の練習時のときの動きに注目していた。いつもと変わらず平静を装って練習に取り組む彼女は立派であった。大会4日前の刺激練習に軽めのビルドアップ走を設定したが、キロ4分のペースにあがる頃に、2年生の松城と1年生の鈴木がそのペースについていけない。計算外の出来事となった。次の日、現地入りする前日に「明日、松城と鈴木と高橋の3人で駅伝コースの1.5km部分を使ってタイムトライアルを実施する。3人の内、上位2名を選手として起用する」と、全員の前で通知した。そして、大会2日前、3人のトライアルを予定どおり実施した。複雑な思いで見守る他の選手たち。3人はスタートからぶつかり合うようにハイペースで走り出した。3人のガチンコ対決は1kmを過ぎても続いた。この時は正直、「近畿駅伝が男子みたいに6区間あればよかったのに…」と恨んでしまった。ラスト200m。前に出たのが高橋と鈴木。松城が少しずつ離れていった。1着高橋、2着鈴木、そして松城。高橋と鈴木が3区、4区に起用されることが決まった。



岡崎は誰よりもこの勝負を複雑に見ていたことでしょう。後の引退ミーティングで「予選会や大阪大会で補欠だった私が、最後の最後、近畿駅伝で走っていいのだろうか」と悩みました。実際にまわりの選手ががんばったから、近畿駅伝に出場することができたのですから。実は大会の前日に選手変更で補欠にまわった松城さんから手紙をもらい、それを読んだらその気持ちがふっ切れました。とにかく、今まで以上に最大限の力を発揮して、走り切ってたすきをつなごうと決意しました」と語っていたのです。岡崎はハイペース覚悟でとばしたに違いない。沿道で実際に岡崎の走りを見て、大きな声援を送った。どんなに苦しくても絶対に後ろに下がるわけにはいかない。絶対に後悔したくないという意地の走りであることが伝わってきた。岡崎はこの区間を7分18秒で走り抜け区間16位。2人を抜いてチームを23位に押し上げた。前に数チームの選手の背中が見える位置で、3区の3年生の高橋にたすきをたくしたのである。この岡崎の走りが高橋の闘志をかき立てたことは間違いない。高橋はたすきをもらおうと、今までの思いをすべてぶつけるような魂のこもった走り



でとびだしていった。

- 中継してからおよそ500m地点で高橋の走りを確認した。軽快なピッチで、必死で前を追う。その動きを見て高橋の起用が間違っていなかったことを確信した。ありったけの声をはりあげて声援を送るが、あっという間に目の前を通り過ぎて行った。あわてて次の地点に移動する。中継所手前のおよそ200m地点。たすきをとってスパートをかける高橋。松城の分まで走るそんな意気込みのように感じた。両手をあげて笑顔で応える4区1年生の鈴木にたすきが渡る。高橋は区間13位の7分14秒で走り切り、6人のごぼう抜きで快走でチームを17位におしあげた。
- 鈴木は1年生ながら1500mを5分00秒55で走るスピードランナー。練習より試合に強い実戦型の選手で、将来のエース候補である。1年生でこの大舞台で走れることに感謝の気持ちを強く持ったことでしょうか。例の500m地点に急いでもどって彼女に声援を送る。鈴木走りを見て、高橋と同様に快走を確信した。近畿駅伝のレベルを考えると、この中盤の位置まで来ると、総合順位をあげることは決してたやすいことではない。3区高橋が逆転の流れをつくり、その流れをさらにいい方向に持っていく殊勲の走りではなかったか。その証拠に総合順位はひとり抜いて16位にとどまるものの、7分17秒の区間11位は立派である。中盤の2区、3区、4区の2.1kmを東雲の3人の選手は、7分18秒、14秒、17秒と2km換算で6分台で走った計算になる。
- 5区は3年生の梶山。大阪中学校駅伝に次いでアンカーの大役を担った。彼女もトラックシーズンが貧血の影響もあり、思うように走れない苦しい日々が続いた。レース後に、人知れず涙を流す彼女の姿を何度も見てきたのだ。さらに、彼女は岡崎とともにこのレースで引退することになっていた。その彼女の最後の走りを熱い思いで見守った。500m地点では大阪4位の玉川中を抜いて15位にあげていた。5区は1区と並び最長の3.2kmある。どのチームも力のある選手を投入してくるので、いくら調子のいい梶山でもきびしい戦いとなる。大阪3位の峰塚中にも迫る。小さくなってしまった彼女の姿を見届けると、ラスト200m地点にあわてて移動。「後ろ来てるぞ!」と、声をかけたたん、玉川中の選手がラストスパート。一気に梶山を追い抜いていった。そこから、梶山が意地を見せてラストスパート。東雲陣地から大声援が送られる。ゴール手前で梶山が抜き返してフィニッシュ。15位東雲45分08秒、16位玉川45分09秒。峰塚は14位で44分56秒と12秒差であった。梶山は11分36秒で区間14位という立派な成績であった。
- 近畿2府4県の5位までのチーム、計30チームが出場する伝統ある近畿駅伝。大阪5位のチームが15位でフィニッシュしたのである。出場した選手全員が、持てる力を十二分に発揮した素晴らしい全員駅伝であった。東雲陣地に出向くと、自然と選手たちの輪ができあがった。「素晴らしい駅伝をありがとう。感動したよ」と声をかけた。梶山が涙を流している。高橋も泣いている。精一杯やり切った達成感で自然と涙が流れるのである。笑顔で泣けることは素晴らしいなと思った。1区を走った木下は自分の走りに納得ができず悔し涙であった。「1区の大役をしっかりとめあげたんだよ。だから、たすきをつなぐたびに順位をあげることができたんだ」と讚えたが泣き止まない。ずっと泣いていた。悔しいと思う気持ちがあれば、それはそれでよし。泣き尽くしたら、次なる夢に向かって果敢にチャレンジすればいいのだ。「来年もこの舞台で絶対に走ろうな」松城が力強くうなずいた。鈴木も笑顔でうなずいた。川端も寺井萌々花も決意の表情をみせた。東雲女子駅伝チームのたすきが、来年も力強く受け継がれていくはずだと思ひ嬉しくなった。
- 女子のレースの興奮がまだ収まらない中、男子のスタート時間を迎えようとした。大阪の予選会を2位で通過した東雲男子駅伝チームの目標は女子よりも高く、8位入賞である。いくつかの他府県の全国駅伝出場チームに勝ちたいし、もちろん大阪の優勝チームである茨木西にも勝ちたいと考えていた。東雲の出場選手は3年生が2人、2年生が4人と若いチームである。それだけに、この近畿駅伝でしっかり戦いけることが、来年、東雲2度目の全国中学校駅伝出場を実現するためにも絶対に必要であると考えていたのだ。11時45分、号砲一発。大歓声の中、花の1区の30人のランナーがいっせいに飛び出していった。下り坂をものすごい勢いで駆け下りていく集団を遠くで見届けた後に、中間点が見下ろせる位置に



移動した。会場にかかる速報の実況では、兵庫県の有力チームや茨木西、登美丘が激しく先頭争いをしていることを伝えている。東雲1区は大阪大会と同じ2年生の奥村。3000mの持ちタイムは9分17秒51で、チームのエースである。ただ、春先は故障に悩まされていたこともあって絶対的な力があるわけではない。6人とも同じような走力を持つチームなので、1区では苦戦を承知で起用した。中間点近くでは20番台中盤あたりに奥村。少し首を傾げ、苦しそうな表情であった。奥村にめいっぱい声援を送り、小走りでラスト200m地点へ。1区の区間賞は滋賀県の志賀中の選手で9分52秒。7位の選手が10分00秒。次々と選手が目の前を駆け抜けていく。奥村の姿が見えた。ラストスパートを必死でかけている。相手も負けてはいない。トラックレース並みの迫力ある光景であった。奥村は10分26秒で25位。順位は悪いが、奥村の前10秒ほどに7~8人の選手がひしめく展開となった。



- 2区は3年生の石田。安定感のある走りを期待して今回は2区に起用した選手。自分の役割を十分

わかっているの、前半から突っこんで走ることはなかった。前に行く選手を目安にひとりずついいいにとらえる走りを心がけていた。中間点ではわずかに順位を上げているのが確認できた。そして、またラスト200m地点。ここでのスパート合戦はこの区間でも凄まじかった。このハイペースで押して来て、まだこんなにも力が残っているのかとびっくりした。石田も渾身の力を振り絞ってスパート。3区2年生の松本にたすきを渡した。区間記録10分27秒で、3人抜いて総合順位を23位に押し上げた。



- 松本は落ち着いてたすきを肩にかけると沈着冷静にピッチを刻む。松本も安定感のある選手で全幅の信頼を置いている。大阪大会では5区で5人抜き区間賞の走りで2位にあげるなど殊勲の走りをした。駅伝の流れを読むと、どうしてもこの区間で大きく順位をあげたい。中間点付近では期待どおりに18番目くらいに順位をあげていた。入賞圏内の8位まで、まだ200mほどの差がある。ラスト200m地点に移動する。大歓声の中、松本もスパート。2人を何とか振り切り、16位でたすきを渡す。区間記録は石田と同じ10分27秒。区間8位の走りで7人抜きを演じたのである。東雲らしい駅伝の流れになったと確信した。

- 4区は中長距離を得意とするスピードランナーの島口。彼も貧血に悩まされてまったく走れない時期があった。今までの苦しい時期を振り払うかのように、長身を生かした力強い走りで必死で前を追う。女子と同様にこの中盤まで来ると順位をあげるのはたやすいことではない。時折、苦しうに首を横にふる場面もあったが、決してペースを緩めることはなかった。中間点付近で声をかけたあと、ラスト200m地点で彼の到着を待つ。先頭が先導車に連れられてくるようにやってきた。今年の駅伝日本一、近畿駅伝6連覇中の加古川山手の独走状態となっていた。4位までが兵庫勢、5位に茨木西、6位も兵庫と、地元兵庫県のチームが圧倒する展開となった。やがて、島口の姿が見えて来た。島口がギヤを切りかえた。得意のラストスパートで前の3人を一気に抜いて、たすきを5区2年生の白石に渡した。島口は3人抜き、10分31秒で区間8位という結果を残した。



- 5区の白石は総合13位でたすきを受け取ると、少し左に折れて下り坂をきれいなピッチで駆け下りる。5秒前に彦根中央、6秒前に桂。茨木西とはまだ1分02秒の差がある。この区間で何とか茨木西の背中が見える位置まで差をつめていきたい。中間点では順位は変わらず。ほぼ縦一列に並んでいるかのように、息づまるデッドヒートが続く。ラスト200m地点。熾烈なスパート合戦。何人かの選手の変動があるものの、総合順位は変わらず13位でたすきを6区3年生寺井に託す。ただし、6位に落ちた茨木西との差は31秒に縮まり、入賞圏内の8位のチームに17秒差まで迫る走りであった。東雲駅伝の流れは途絶えていない。白石のタイムは島口と同じ、10分31秒で区間8位であった。

- アンカーを託したのは3年生の寺井。大阪大会では序盤の2区に起用した選手であるが、近畿駅伝では6区でも混戦になることが十分に予測できたので、彼のスピードに期待しての起用となった。応援に来てくださった保護者の方と、中間点付近で寺井がやってくるのを見守る。1位から5位までは兵庫勢が独占。県大会でもこのコースを走っている地の利があるとは言え、他府県を寄せつけない圧倒的な強さはさすがである。茨木西のアンカーが目の前を通過して、すぐに寺井の姿を見つけた。興奮ぎみに「8位入賞や！茨木西に勝てるぞ！！」と大きな声をかける。寺井の走りの方に勢いがあるように感じた。「(茨木西に)勝てるかも知れませんね」と、互いにわくわくしながら、ラスト200m地点に移動した。加古川山手が優勝、7連覇。兵庫勢が5位までを独占。6位に桂、7位に広野。遠くをずっと目を凝らして見つめる。時間が妙に長く感じて焦れた。



2人の選手の姿が遠くに見てとれた。彦根南と東雲である。茨木西の姿はまだ見えない。寺井が見事に逆転したのだ。ここでまた迫力あるスパート合戦。後方に位置していた寺井が懸命に前を追うが追いつかない。8位で全国中学校駅伝出場校でもある彦根南がフィニッシュ。その4秒後に東雲の寺井がフィニッシュ。1時間02分50秒で9位。惜しくも8位入賞を逃したが、女子と同様に十二分に自分たちの力を出し切った素晴らしい駅伝レースとなった。



- 正式記録を見て驚いた。6区アンカーの寺井は10分28秒で区間10位。東雲の6人の選手はまったく同じ3.2kmのコースを走って、10分26秒から31秒までの5秒以内の誤差で走り切ったことになる。ペースはいいが、とにかく誰ひとりブレーキすることなく、確実にたすきを運んだことになる。「よくやったな。来年につながる素晴らしい駅伝だったよ」と、声をかけた。みんなしっかり前を見て満足そうな表情を浮かべた。近畿駅伝のレースを終えて、またひとつみんなが大人になったような気がした。「タイムトライアル行くよ！」今回は出番がなかった選手が、東雲のユニフォームに着替えてレース終了後にタイムトライアル。今度は出場選手たちが大声援を送った。閉会式は中継所近くの奥神鍋体育館。男女あわせて60チームが整列し、互いの健闘を讃え合った。
- あっという間の2泊3日の近畿駅伝の遠征であった。バスの運転手さんや、宿舎の方々には大変お世話になりました。男女あわせて21人の選手が寝食をともにできたことで、たくさんのことを学んだことと思います。そして、このことが来年、さらに大きな夢に挑戦する起爆剤となったことは間違いない。



東雲中陸上部はどこにでもある普通の部活動。朝練習もない、行事の取り組みで練習が継続できないこともある。中長の練習メニューも1日に10km以上走ることもまずない。そんなチームが大阪大会の地区の予選会で男子3位、女子2位のチームでした（三島地区で勝てなかったチームなのです！！）それでも、自分たちの可能性を信じて、この近畿駅伝でも素晴らしいレースをやり切ることができたのです。全国の駅伝強豪校と勝負するには、練習量をもっと増やさなければならぬことはよくわかっています。そのためにも、まずは毎日の練習の質を高めていくこと。それが徹底できたら、走行距離を伸ばしていこうと思います。それでも距離を極端に追うことはしません。中学生の可能性を信じ、伸びやかに中長距離に取り組ませることにより、高校、大学とさらに大きく選手として成長してもらいたいと考えるからです。そのためにも練習の意図と流れをいつもよく理解して練習に取り組んでください。そうすれば、足し算ではなく、掛け算的な効果でますます強くなっていくはずですよ。来年は東雲2度目の全国中学校駅伝出場が大きな目標になります。このでっかい夢に挑戦できることに感謝の気持ちを持って、日々輝いて練習に取り組んでいきましょう。

